品川区立台場小学校・幼稚園　　令和８年１１月１８（水）
台場の灯（ともしび）（校園長通信）No. ２７　校・園長　滝渕　正史

背中を押すタイミング




（写真は左が６年生提案発表・右が５・５交流の様子より：本文とは関係がありません）

毎日が順風満帆に進めばこんなにうれしいことはありませんが、やはり世の中、うまくいく時ばかりではなく、「困ったな」と思うことも日常的に起こります。例えば、児童が感じる「困ったな」は、友達や教員など大人などとの、対人的な関係のことや、学習など学校生活の中でやらなくてはならないこと（でも、うまくいく自信がないと感じること）などでしょうか。それも、一時のことなら楽なのでしょうが、そんな気持ちは継続するので、本人は大変です。

私が、児童に身に付けてほしいと考えていることは、そのような「困ったな」と感じるようなことに、自分なりに向き合い、自分なりに処理をしていく力です。例えば、「嫌だな」と思うことから、しばらくは距離を取ってやり過ごすこともありだと思いますし、そのことと何とか折り合いをつけて、自分なりに乗り越える術を見つけていくということもあるでしょう。一つのゴールイメージとしては、子どもが自分なりに、その「困難なこと」との距離感を図りつつ、自分で何とかその課題に向き合い、解決を目指そうと主体的に前に進むことができる力を獲得することなのではないかと考えています。

でも実際は、その力を獲得することに難しさを感じる児童は多いです。（大人にはそうは見えなくても）本人にとっては、その「困ったな」ということが、とても高い壁に見えるため、乗り越えようと思えずに諦めてしまう場合が結構あります。そんな時の大人の役割は、背中を押すタイミングと押すときにかける言葉をどう考えるかだと思うのです。

「学校に行きたくない」「（わからないから）やりたくない」「（先生に）言われたことが嫌だった」など、壁を感じた時の言葉（「困った」の要因）は様々です。もちろん、そのような発言に対し、頭ごなしに「何を言ってるの」と否定して、常に強く背中を押すことをよしとする訳ではありません。しかし、子どもの言うことをすべて受け入れ、「やりたくない」「行きたくない」気持ちから、なかなか抜け出せない状況が続いてしまうことも、もったいないと思うのです。

「やりたくない」「行きたくない」と言っている子どもも、心のどこかで、実は「何とかしたい」という思いをもっています。でも、そこから踏み出すのは、本当に大変なのだと思います。だからこそ、背中を押されることで踏み出せるケースは多いはずです。「嫌だ」という気持ちを大人が受け止めつつ、それでも前に進むことを目指していく気持ちがもてるよう、励ますことも大切だと思います。さらに、家庭と学校が、同じ方向を向いて、双方の立場から背中を押すこと（励ましていくこと）が、とても大切だと考えています。